バングラデシュにおける農村間出稼ぎ労働者の生活
－コミラ県での農村調査から－

須田　敏彦

大東文化大学大学院アジア地域研究科発行
大東アジア学論集　第18号
2018年3月

論文

バングラデシュにおける農村間出稼ぎ労働者の生活

—コミラ県での農村調査から—

The Life of Rural to Rural Migrant Laborers in Bangladesh -Findings from a Field Survey in Villages in Comilla District -

須田敏彦（Toshihiko SUDA）

Summary

Bangladesh, one of the poorest countries in Asia, has started to develop rapidly in recent years. However, urban based industries such as garment industry are not strong enough to absorb all the surplus laborers in poor rural areas. In addition, recent development has created imbalances among regions. These two factors put pressure on the laborers of poor regions to move to relatively rich rural regions for employment opportunities and higher wage.

Importance of rural to rural labor migration in development has been recognized. However, due attention has not been paid to this issue in Bangladesh. Therefore, the author conducted a small field survey to investigate the life of rural to rural migrant laborers in Comilla District, a relatively rich district in Bangladesh.

The main findings are as follows. Most of the migrant laborers interviewed are from Rangpur Division, the poorest region in Bangladesh. They are engaged in various works such as agricultural labor, construction works, rickshaw pulling, and peddling. They send a substantial portion of their income to their families living in their home villages. In most cases, their livelihood has improved after starting migration. But their income is not high enough to save money for starting business in their home villages or going abroad for more remunerative employment.

第1章　はじめに

バングラデシュはアジアの中でも屈指の貧困国で、一人当たりのGNI（国民総所得：購買力平価表示）は2016年で3790ドルにすぎず、アジアではアフガニスタン（1900ドル）、ネパール（2520ドル）、カンボジア（3510ドル）に次いで低い（World Bank 2017）[1]。国民のおよそ8割は農村部で生活し（2011年で77%、BBS 2015d）、また就業者（15歳以上）の45.1%が農業に従事している（2013年、BBS 2015a:.53）。農業には従事しているが、自分の農地を持たない土地なしも多い。農村世帯の35.0%は耕地を持たない土地なし世帯であり、農村世帯の34.4%が、他人の農地で働くことで得る農業労賃が主な所得の農業労働世帯である（BBS 2010）。農業以外の就業機会が少ないため、土地を持たない人の多くは、雇われて他人の農地で働いているのである。

その一方で、バングラデシュでも輸出向け既製服の縫製産業の成長と多数の海外出稼ぎ者から送られる多額の送金をテコとした経済成長が近年着実に進行している（須田 2010）。特に縫製産業は、既製服の輸出額が中国に次いで世界第2位の地位を占めるまでに成長した。1980年代に4.0%だった実質GDPの平均成長率は、1990年代に4.7%、2000～2010年は5.6%になり、2010～2016年は6.5%へと上昇している。さらに、人口増加率が低下しているため、1人当たりの実質GDP成長

率は、上記の4期間でそれぞれ年平均1.3%、2.5%、4.1%、5.2%と急上昇している[2]。停滞するアジアの象徴的な存在だったバングラデシュは、成長著しい国に変貌しつつある。

縫製産業に代表される都市を基盤とした産業の成長に伴い、農村部から都市部への人口移動が続いている。このため、農村部から都市部への人口移動に関しては、バングラデシュでも多くの研究成果がある(例として、Afsar 2005)。また、海外出稼ぎ者の増加により、海外出稼ぎに関する研究も多い(Siddiqui 2005, 須田 2010)。一方、農村と農村の間の人口移動に関する研究は最貧困層の人口移動として重要性が認識されているものの(Skeldon 2005: 20)、管見の限りバングラデシュでは非常に少ない。おおむね10年ごとに行われるバングラデシュの人口センサスには農村間の移動人口についての情報があるが、移住(migration)の定義が、結婚に伴う住所の変更を除き、新しい住所に移ってから6か月以上経過すること、と定義されているため(BBS 2015c, p.51)、短期間家族から離れて他地域で働く季節労働者や滞在先を転々と変えながら働く人の数は把握されていないのである。

しかし、農村間の労働力移動は、現在のバングラデシュでは重要な意味を持つ。それは、バングラデシュの経済発展の速度が地域的に不均衡であることから農村間で労働力の過不足が生じ、それを調節するために、労働力の大規模な移動が農村間で起きているからである。農村間の労働力移動は、豊かな地域から貧困地域、その中でも貧困層に所得を移転する機能をもち、貧困地域の経済発展や貧困層の生活改善にも貢献する。上述のようにバングラデシュは近年急速に成長する経済に転換しつつあるが、それはダカ市やチッタゴン市など中核の都市における縫製産業の発展と、海外出稼ぎ者が多い南東部を中心とした農村部への送金の流入を二つの主要なエンジンとして進んでいる。本稿が対象とするバングラデシュ南東に位置するコミラ県は、海外出稼ぎ者が多く、また大都市のダカ市とチッタゴン市の間にあって交通の便がよいためバングラデシュの中では経済的に比較的豊かで労働力が不足している地域である。そのため、バングラデシュ北部を中心とした貧困地域から、大量の労働力が流入している[3]。

そこで筆者は、バングラデシュでは十分な研究が行われていない農村間の出稼ぎ労働者の実態を把握することを目的とし、コミラ市近郊の農村部におけるバザール、およびその近くにある村を中心に現地調査を行い、相対的に豊かなこの地域にやってくる労働者に関する情報を収集した。調査の内容は、どのような地域から誰がどのような理由でやってくるのか、また出稼ぎ先での仕事と生活のあり方、故郷や家族との関係、今後の展望などについてである。また、出身地域の貧困者の一般的な状況や貧しい女性の就業状況についても情報を得た。ヒアリングの対象となった出稼ぎ労働者の数は20人と少ないが、類似の研究が少ない中、農村間の労働移動のメカニズムと地域的差異や地域間の関係を視野に入れたバングラデシュ全体の経済発展の構造を理解するためにも、意味がある試みだと考える。

本稿の構成は、以下のとおりである。次章(第2章)では、バングラデシュ経済の地域格差を整理した上で、調査地における経済的状況と出稼ぎ労働者の変化について概観する。第3章では、2017年に実施した出稼ぎ労働者へのヒアリング調査に基づいて、調査地域で働いている出稼ぎ労働者の就業状況と生活

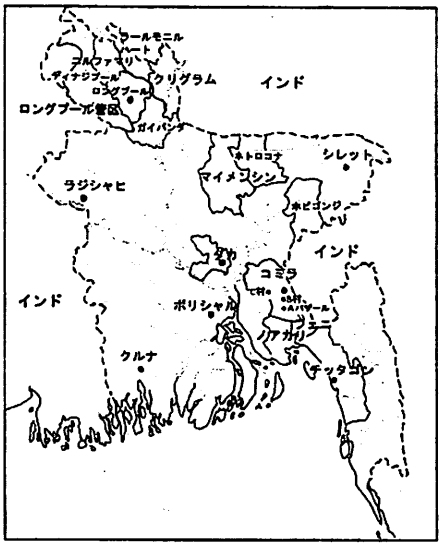
の実態を明らかにする。第5章は、まとめと提言である。

第2章　調査村における経済環境と出稼ぎ労働者の変化

(1) 全国における地域間の経済格差

本章では、まず調査村があるバングラデシュ南東部と、調査村に多くの出稼ぎ者がやってくる北部の関係について簡単に説明したい（図1）。

図1　バングラデシュの地図と調査地の位置



出所：筆者作成。

表1　バングラデシュにおける経済的地域格差

	世帯の平均所得（タカ/月）（2010年）	低位貧困線以下の世帯の割合（%）（農村部、2010年）	高位貧困線以下の世帯の割合（%）（農村部、2010年）	海外送金受取り世帯の割合（%）（2016年）	農業労働者世帯の割合（%）（2008年）
全国	11,479	21.1	35.2	5.4	30.8
ボリシャル管区	9,158	27.3	39.2	4.4	27.7
チッタゴン管区	14,092	16.2	31.0	12.2	26.0
うち、コミラ県	N.A.	21.1	37.9	N.A.	30.4
ダカ管区	13,226	23.5	38.8	4.3	24.1
クルナ管区	9,569	15.2	31.0	4.4	39.2
ラジシャヒ管区	9,342	17.7	30.0	3.2	39.3
ロングプール管区	8,359	30.8	47.2	2.1	N.A.
うち、ロングプール県	N.A.	30.1	46.2	N.A.	39.0
クリグラム県	N.A.	44.3	63.7	N.A.	48.8
シレット管区	11,629	23.5	30.5	5.4	29.9

出所：BBS(2010, 2011,2016), World Bank(n.d.)から筆者作成。
注：1. 低位貧困線は、必要とされる1人1日2122kcalの食料だけを得るのに必要な支出額（食料貧困線）。
高位貧困線は2122kcalの食料を得ている世帯の非食料支出（非食料貧困線）と食料貧困線の支出額を足した貧困線。
2.「海外送金受取り世帯の割合」は、2011年の人口に対する2016年の海外送金受取り世帯数（推計値）の比率である。
3. ロングプール管区は、2010年にラジシャヒ管区から分離して作られた。したがって、2008年の農業センサスの実施時点にロングプール管区はなく、ロングプール県とクリグラム県はラジシャヒ管区の一部であった。

表1が示すように、バングラデシュの中には経済的に大きな地域格差が存在している。本稿の調査村が位置しているコミラ県はチッタゴン管区に属するが、同管区は一世帯当たりの平均所得が全国7管区中最も高く、貧困度も軽微な地域であることがこの表からわかる。海外出稼ぎ者が多いのがこの地域の重要な特徴で、平均して8世帯に1世帯の割合で、海外から送金を受け取っている。海外からの平均送金額は月平均で1万7137タカ(2013年。BBS 2016: 11から筆者計算)と、全国平均的世帯の所得(1万1479タカ)を大きく超えており、海外で働く出稼ぎ者がいる世帯の所得が高いことがわかる。このことが、同管区が経済的に豊かであることの重要な理由の一つとなっている[4]。

対照的にバングラデシュで最も貧しい地域は、北西部に位置するロングプール管区である。世帯の平均所得は全7管区中最低であり、チッタゴン管区平均の59%に過ぎない。貧困世帯の割合は全国で最も高く、3割の世帯が十分な食料を得られない低位貧困線以下(極貧)の生活をおくっている。その割合は、チッタゴン管区の倍近い。高位貧困線を基準にすれば、農村世帯の半数近く(47.2%)が貧困状態にある。海外出稼ぎ者がいて海外送金を受け取っている世帯の割合は全国で最も低い。一方、他の農家に雇われて得た農業労賃を主な所得源とする農業労働世帯の割合が高い。

(2) 調査村で雇われる農業労働者の出身地の変化

バングラデシュでは都市部の労働吸収力がまだ弱い。また、海外出稼ぎにいくためには、多額の資金が必要で高いハードルが存在する。こうした中、地域間の経済格差は、貧困地域から相対的に豊かな地域に向けた農村間の労働力移動を生む圧力となる。この圧力は、筆者がコミラ県の調査村で調査を始めた1988-90年以降、強くなったと考えられる。

表2　B村で働く農業労働者の出身地(1989年1月31日、2月1日)

(人、%)

	出身地域					
	B村内	隣接村	同じ郡の中	同県内の他の郡	他県	合計
人数(人)	3	15	5	65	16	104
割合(%)	2.9	14.4	4.8	62.5	15.4	100.0

出所: 須田(1991)、p.131.から作成。
注:1. 隣接する郡の内訳は、チャンディナ郡16、ボルラ郡46、ラクシャム郡3。他県の内訳は、ロングプール県12、マイメンシン県3、フォリドプール県1。
2. 調査時は、ボロ稲の田植時期で農繁期であった。

バングラデシュの農村では、豊かな農家は自ら農作業に携わることが少なく、日雇い労働者を雇って農作業をさせることが多い。中・下層の農家も、農繁期には農業労働者を雇うことが多い。そのため、日雇い労働者が提供する労働力は、バングラデシュの農業生産においてきわめて重要な役割を担っている。

表2は、筆者による1989年の調査時(1～2月)に、調査村の一つB村で雇われていた農業労働者の出身地を示したものである。調

査時は乾季の稲作（ボロ稲）の田植え期にあたり農繁期であった。この調査が行われた1989年は、バングラデシュから海外に出稼ぎに出る人はまだわずかで、輸出指向型の縫製産業の発展も萌芽的な状況であった。そのためコミラ市近郊のB村周辺においても非農業就業機会は少なく、農業賃金労働者が多く存在し、雇用労働力の供給源として重要な位置を占めていた。しかし、農業労働者の主力だったのは、同じコミラ県の中にある他の郡からの出稼ぎ労働者であった。これらの郡では都市化が遅れていて非農業就業機会が少ない上に緑の革命が十分進んでおらず、地下水を利用した乾季の稲作（ボロ稲）もあまり普及しておらず、労働力過剰の状態にあった。そして、B村のように緑の革命が早くから進み労働力が不足気味だった地域へ、多くの貧困層が出稼ぎ労働者として農繁期に出ていたのである。C村がある郡も季節的な出稼ぎ労働者を供給する貧困地域であった。C村では1989年の調査時に67人の農業労働者がいたが、そのうちほぼ半数の33人は、季節農業労働者として主にB村がある地域へ出稼ぎに出ていた（須田 1991: 83)。

一方北西部（ロングプール管区）からの労働者は、この時期にはまだそれほど多くなかった。調査日に104人いたB村の農業賃金労働者のうち他県からの出稼ぎ者は16人に過ぎず、ロングプールからの出稼ぎ者はそのうち12人（全体の12%）だった。今のように農業労働者が県域を越え300キロ以上離れた農村間を大規模に移動する状況は、この時点ではまだ一般的でなかったといえよう。

表3 コミラ県の調査村で農家に雇用される農業労働者の出身地(2016年)

（世帯、%）

		B村（コミラ市近郊）		C村（純農村）		合計	
		世帯数	割合(%)	世帯数	割合(%)	世帯数	割合(%)
地元労働者のみ		0	0.0	55	39.0	55	24.8
ロングプール管区	地元労働者＋ロングプール	1	1.2	37	26.2	38	17.1
	ロングプール	36	44.4	0	0.0	36	16.2
	ロングプール＋ディナジプール	26	32.1	0	0.0	26	11.7
	ロングプール＋ガイバンダ	4	4.9	0	0.0	4	1.8
	ロングプール＋ニルファマリ	6	7.4	0	0.0	6	2.7
	ニルファマリ	1	1.2	0	0.0	1	0.5
	ロングプール管区の人を雇う農家合計	74	91.4	37	26.2	111	50.0
農業労働者を雇う農家		74	91.4	92	65.2	166	74.8
自家労働力のみの農家		7	8.6	49	34.8	56	25.2
農家総数		81	100.0	141	100.0	222	100.0
世帯総数		193		216		409	

出所：2016年実施の調査による。
注：1.「農業労働者を雇う場合、どの出身地の人を雇っているか？」という質問に対する各世帯からの回答である。
2. 本表における「農家」は、借地を含めて、作物を栽培している世帯をさす。
3.「割合(%)」は、農家総数に占める割合である。
4.「地元」(local)の定義はしていないが、同じ村や周辺の村と理解してよいと考えられる。
5. 管区（Division）は、複数の県（District）から構成される。この調査の回答からは、「ロングプール」が、ロングプール管区を指すのか、ロングプール県を指すのか明確ではないが、C村では、「ロングプール管区」の意味だと考えられる。
6. ロングプール、ディナジプール、ガイバンダ、ニルファマリは、ロングプール管区を構成する県である。

しかしこうした状況は、その後大きく変わる。表3は、2016年にB村とC村で雇われた出稼ぎ農業労働者の出身地を示したものである。この表からわかるのは、この間に都市近郊のB村付近では農業労働者がいなくなり、ほとんどの雇用労働力をロングプール管区か

らの出稼ぎ労働者に依存するようになったことである。地元の農業労働者を雇うという世帯は、81農家中わずか1世帯に過ぎなかった。一方、純農村部のC村では非農業就業機会が限られているため、今でも多くの農業労働者が村内に存在する。そのため依然として地元の農業労働者への依存度が高いが、ロングプール管区からやってくる出稼ぎ労働者の存在も大きくなっていることがわかる。B村、C村の世帯数はそれぞれ193、216で、農業世帯（農家）数はそれぞれ81、141であるから、2016年の調査時には、B村では全世帯の38.3%、農家の91.4%が、C村でも全世帯の17.1%、農家の26.2%が、ロングプール管区からの農業労働者を雇っていたのである。

このように、県域を超えた農村間の労働者の移動が大規模に起きているにもかかわらず、彼らの就業や生活の実態は十分明らかにされているとはいえない。そこで筆者は、主にB村付近で働くロングプール管区など他県からの出稼ぎ労働者を対象とした小規模な実態把握調査を行った。次章は、その結果である。

第3章　現地調査から見る出稼ぎ労働者の就業と生活の実態

(1) 調査の目的と方法

本調査は、調査地（コミラ市近郊の農村部）に一時的に滞在して日雇い農業労働（主に稲作）や建設労働、リキシャー引き[5]、魚捕り、行商などに携わる県外出身者を対象としている。彼らの就業と生活の実態、調査地にやってきた理由と方法、家族との関係、今後の展望、送金の方法、出身地における他の貧困者・女性貧困者の就業状況などが主な調査項目である。

調査は、コミラ市近郊（中心から5キロほど）の農村部にあるバザール（Aバザール）周辺で生活したり就労している他県出身者から無作為に選ばれた20人に対して行われた。調査の方法は、筆者が作成した質問票にしたがってヒアリングを行うものであり、ヒアリングはすべて筆者が直接行った。質問票にある項目以外の質問も、必要に応じて行われた。調査は2017年の2月と3月に行われた。この時期は、乾季の稲作（ボロ稲）の田植が終わり、田植作業（機械化がされておらず、手作業で行う）のためにやって来ていた多数の短期出稼ぎ労働者（筆者が知る限り、女性はいない）のほとんどが故郷に帰った後である。そのため、調査の対象となったのは、一年の大半を出稼ぎ先で過ごす長期出稼ぎ者がほとんどであった。また、農業以外の仕事（土木・建設作業、行商、木材の伐採作業、リキシャー引きなど）に従事している人もいた。

(2) 出稼ぎ労働者の仕事と生活の実態

①出稼ぎ労働者の概要

Aバザールの周辺で無作為に選んでヒアリングをした県外出身の労働者20人の概要は、表4の通りである。

まず、性別だが、全員が男性である。出身地は、20人中17人がバングラデシュ北西部のロングプール管区のクリグラム県、ロングプール県、ラールモニルハート県、ガイバンダ県であった（図1）。調査地とは直線距離で300キロほど離れ、直行の夜行バスで12時間ほどかかるという。残りは、北部のネトロコナ県（ダカ管区）、北東部のホビゴンジ県（シレット管区）、そしてコミラ県に隣接するノアカリ県（チッタゴン管区）出身の人が各一人であった。

このようにロングプール管区の人が圧倒的に多いが、その中でも13人がクリグラム

表4 出稼ぎ労働者の概要

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
出身管区	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ロングプール	ラールモニルハート	ロングプール	ロングプール	ダカ	シレット	チッタゴン
出身県	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	クリグラム	ロングプール	ガイバンダ	ガイバンダ	ガイバンダ	ネトロコナ	ホビゴンジ	ノアカリ
出身郡	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	ナゲシワリ	タラゴンジ	N. A.	スンダルゴンジ	スンダルゴンジ	N. A.	N. A.	ラクシミプール
年齢	50	32	28	42	50	27	53	52	25	50	46	28	29	55	40	27	27	55	35	35
性	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
教育(年)	0	3	0	4	0	5	0	0	0	5	8	4	0	0	0	0	0	8	2	5
農地面積(エーカー)	0	0	0	0	0	0	0.24	0	0.33	0	0	1	0.55	0	1	0	N. A.	0	0	0
出稼ぎ年数	5	17	10	22	20	14	35	20	10-12	10-11	24	15-16	1	3-4か月	15	8-10	19	6	15-20	7
主な仕事	農業	農業、土木	農業、土木	農業、土木	農業、土木、建設	土木、木材の伐採、農業、リキシャ引き、建設	農業、リキシャ引き、土木	土木、農業	農業、リキシャ引き	農業だけ	土木	農業、土木、肥料工場勤め	木材の伐採	農業、木材の伐採	リキシャ引き	農業、リキシャ引き、魚とり、魚の商売	農業、リキシャ引き、魚とり、魚の商売	農業だけ	竹商(鳥子売り)	荷車引き
就労している他の家族	息子(建設)(ダカ)	なし	なし	なし	息子(農業、リキシャ引き、建設)	なし	息子(農業労働)	息子(農業労働)	なし	息子(ダカの縫製工場)	なし	なし	兄(食料商売)	なし	N. A.	N. A.	N. A.	なし	なし	妻(コミラの靴工場)
出稼ぎ先	コミラ	コミラ、フェニ	コミラだけ	コミラ、フェニ、ノアカリ、ボグラ、ロングプール	コミラ、ノアカリ、ボグラ、ディナジプール	コミラだけ	コミラ、ノアカリ、フェニ、ボグラ、ディナジプール、ダカなど	コミラ、ディナジプール、ダカ、ボグラ	コミラ、ボグラ、ムンシゴンジ、ダカ	コミラ、フェニ	コミラ多い。チッタゴン、ダカ、ノアカリ、など	ノアカリ、フェニ、コミラ、ダカ	コミラ	コミラだけ	コミラ	ダカ、フェニ、チッタゴン、など	コミラだけ	コミラ多い。フェニ、チッタゴン	コミラに住む	コミラに住む
夜寝るところ	学校の軒下	学校の軒下	借家(3-4人でシェア)	市場の床	村に一人で野菜を借りる	野菜を村に借り家族と住む	借家(3-4人でシェア)	学校の軒下	学校の軒下	学校の軒下	学校、牧場の軒下	学校などの軒下など	村に借家し一人で住む	村に借家し家族と住む	借家(8人でシェア)	借家(5人でシェア)	借家(5人でシェア)	学校の軒下	村に借家し家族と住む	村に借家し家族と住む
年間出稼ぎ期間	6か月以上	9か月	11か月	10か月	9か月	1年中	9か月	10か月	6か月	11か月	10-11か月	8-10か月	8か月	一年中	N. A.	6か月	6か月	8-10か月	一年中	一年中
日給(タカ/日)	300	300	N. A.	300	300 (三食付き)	500	N. A.	300-400	300	250-300	400-450	300(3食、7-7時)	500	300～350(食事は自分)	400タカ/日(稼ぎ)	500タカ(魚とり)	500タカ(魚とり)	N. A.	費用を除き、350-400タカ	300-400
故郷の日給(タカ/日)と仕事の有無	100	100-150	100-200、平均150(食事なし)	100(仕事あれば)	N. A.	N. A.	250タカ(食事なし)	仕事ない	100	仕事ない	100	200タカ多い(食事なし)	N. A.	200タカ、仕事少ない。	N. A.	200タカ、食事つき	200タカ(食事付き)	250-300タカ(食事は自分で)	N. A.	仕事ない
出稼ぎ先の月収(タカ)	6000	7500	4500-6000	9000	5000-6000	15000	N. A.	N. A.	9000-10000	7000	N. A.	7000－8000	11000-12000	6000－7500	N. A.	15000	15000	4500-6000	10500-12000	9000-12000
送金額(タカ/月)	4000	6000	N. A.	7000	N. A.	月に500-1000タカを母親に送る	N. A.	6000-7000	7000	3000－4000	N. A.	N. A.	8000-9000	なし	N. A.	6000	6000	3000-4000	N. A.	N. A.
出稼ぎに出た理由	地元に仕事がない	出稼ぎのほうが収入多い	地元に仕事がない	貧しい。食べられない	貧しい。仕事ない	N. A.	N. A.	コミラのほうが賃金高い	故郷に仕事ない	川の洪水で土地なくなった	地元に仕事がない	地元に仕事がない	所得をふやすため	貧しい。仕事ない	地元でリキシャ引きは恥ずかしいから	仕事少ない	N. A.	地元に仕事がない	地元よりよい収入できる。平和、子供の教育のため	川のそばで仕事ない
出稼ぎによる生活変化	前よりはよい	仕事があれば問題ない	前よりはよい	食べるだけ	以前よりよくなったが十分でない	N. A.	貯金はできないが、生活できる	生活なんとかやっていける。	よくなった。生活できる	N. A.	生活費足りない。	家を作り牛を買った	生活よくなった	今は何とかやっていける	金貯まれば商売	子供の時よりよくなった	N. A.	今は、何とか生活できる	夏が旱魃で働き、生活よくなった	自分は年。これ以外の仕事できない。
将来の希望	低利融資あれば商売したい	金貯まるか融資受けられれば商売をしたい	商売か海外出稼ぎ	他の仕事できない。その仕事をするだけ	商売、海外出稼ぎ	故郷に帰り、家をつくり、商売をする	金があれば海外出稼ぎか商売	金があれば商売。しかし、金ない。	商売	商売したいが、金ない(借金の利子の返済で余裕ない)	よい仕事あれば、それをする。	商売や海外出稼ぎをしたいが金がない	商売(ストック、コメ、小麦、豆)したい	金が貯めたら帰って商売	金貯まれば商売	金あれば海外出稼ぎや商売をしたい	N. A.	商売や海外出稼ぎ。牛を買う。	金あれば海外出稼ぎ。故郷に帰り教育料の商売。	金あれば海外出稼ぎ。牛を買う。
現在の借金	今は借金なし	5.5万タカ借金あり(GB3万、BRAC2.5万)	N. A.	4万タカ(NGOから。洪水のせいで借金)	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	結婚資金で10万タカ(GB、金貸)	GB、BRACから借金。	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	35000タカ。利子、月10%。	N. A.	N. A.
同郷の貧困層の状況	N. A.	農業の出稼ぎか縫製工場勤め。子供と年寄を除き、みんな出稼ぎに行く。	コミラに農業の出稼ぎ	9割は出稼ぎ(フェニ、ノアカリ、ボグラなど)	ダカ、コミラに出稼ぎ。靴工場や縫製工場。女性も。	周りの人は、ほとんど出稼ぎに行く	ほとんど出稼ぎに。農業労働。近い人は縫製工場や靴の工場。	N. A.	フェニ、コミラで農業、ダカで縫製工場	N. A.	N. A.	N. A.	出稼ぎ多い(コミラは農業、ダカは縫製工場)	ダカで縫製工場か、コミラ、ディナジプールで農業出稼ぎ	N. A.	N. A.	N. A.	縫製工場。海外出稼ぎに行く人もいるが、コミラほとんどはいない。	N. A.	農業
同郷の貧しい女性の状況	N. A.	N. A.	女の人は仕事をしない	ダカやコミラで縫製工場に行く人も	縫製工場に出稼ぎ、近の場設作業	縫製工場で働く	4－5年前から、女性も縫製工場で働く	N. A.	ダカ、コミラで縫製工場	N. A.	ダカやコミラで縫製工場。女性も田植えや稲刈りする	N. A.	コミラで縫製工場勤めの人も	縫製工場(ダカ)	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	N. A.	収穫後の農業作業、チッタゴンで縫製工場

出所:2017年2月、3月に実施した現地調査。
注:1. N.A.は、データが得られなかったことを示す。
2. GBは、グラミン銀行を示す。

県のナゲシュワリ郡(Nageshwari Upazila)出身と、多数を占めていた[6]。クリグラム県は、ヒマラヤ山脈に降る雨や雪を集めてバングラデシュに流れ込む大河ブラフマプトラ川沿いにある。そのため洪水被害を受けやすく、既出の表1が示すように低位貧困線以下(極貧)の人の割合が44.3%、高位貧困線以下の人の割合が63.7%と、貧困者の割合が全国で最も高い。極貧人口の割合は全国平均(21.1%)の倍以上である。農業労働による賃金が主な所得源である農業労働世帯の割合は48.8%と、県内総世帯のほぼ半数に達する(World Bank n.d.)。

回答者は大半(回答が得られた19人中14人)が農地を持たない土地なし世帯の人であり、回答者の半分(20人中11人)は全く学校教育を受けたことがない。貧困地域出身の中でも特に貧しい人が多いことがわかる。平均年齢は39.3歳で、25歳から55歳までと大きな幅がある。

彼らの多くは10年から20年、長い人では30年以上も、長期間の出稼ぎを単身で続ける生活をしている。一度故郷を離れると2～6か月の間、バングラデシュの中では豊かなチッタゴン管区内のコミラ県やフェニ県、ノアカリ県などを移動して仕事をして故郷に戻る。そしてしばらくしてまた出稼ぎに出ることを繰り返し、一年のうち半年から11か月もの期間を出稼ぎ先で過ごすのである。

②出稼ぎ労働者の労働状況

回答者のほとんど(20人中19人)は、様々な肉体労働に従事している。彼らが従事する仕事で多いは、農作業(写真1)、土木作業(池や建物、道路などを作るための土掘り作業)、木材の伐採作業、建設作業、リキシャー引き(写真2)である。回答者の中には、魚とり(池で養殖された魚の捕獲など)、お菓子の行商などに従事している人もいた。このうち、農作業、土木作業、木材の伐採作業、魚とりなどは日雇い労働であるが、リキシャー引きや行商(菓子売り)は、自営業に分類される仕事である。

写真1　田植えをする労働者

出所：筆者撮影(2014年8月)。B村の隣村で。
注：雨季のアモン稲の田植え

写真2　ラールモニールハート県から来た出稼ぎのリキシャー引き(B村)

出所：筆者撮影(2017年)。B村内で。
注：8人で一部屋を借り、共同生活をする。

仕事の見つけ方は、仕事によって異なる。農業労働の場合、バザールの一角に早朝(6時から8時)に立ち、労働者を探しにやってくる農家と仕事の条件について交渉するのが基本である。初めて行った場所では、この方法で仕事を探すことが多い。しかし、携帯電話が普及した現在では、以前に働いた経験がある知り合いの農家と携帯電話で連絡をとり、

仕事を探すことも多い。労働力を必要としている農家のほうから連絡してくることもある。いずれの方法にせよ交渉が成立すれば、その農家のところに行き仕事をして賃金をもらう。朝8時から午後4時まで働き、2食ないし3食の食事をもらう。そのため、仕事があれば、食事を自分で作ったり購入して食べる必要はない。

土木作業の場合、労働者はショルダールとよばれる親方の下に組織されていることが多く、親方の指示に従って働くことになる。親方は知りあいの土木請負業者（コントラクター）と連絡を取り、必要な労働者を集めるのである。食事は、昼食だけショルダールが出すという。

賃金は、農作業（2食付）で一日300タカ程度（1タカはおよそ1.4円）、土木作業（一食付き）は400～450タカ、仕事がきつい木材の伐採作業は500タカであるという。一月のおよその所得は人によって異なり、6000～1万5000タカと大きな幅がみられた。回答者の中では、若い人ほど仕事がきつく賃金の高い土木作業や木材の伐採作業に従事する人が多く働く日数も多いため、月収は高い傾向がある。一方、年齢の高い人は、農作業中心で仕事の日数も少なく、月収は相対的に低い傾向が表1から見られた[7]。輸出向け生産の増加とともに雇用者数が増えている衣類の縫製工場の賃金は月1万タカ程度であることから[8]、若くて体力に自信がある人にとっては、縫製工場で働くより多くの所得が土木作業や木材の伐採作業で得られるといってよいだろう。また、回答者には全く学校教育を受けていない人が多いが、彼らにもできる仕事という点からも魅力的なのかもしれない[9]。一方、農作業は、縫製工場で働くほど所得は高くないが、高齢で教育を受けていない人でも安定した所得が得られる仕事といってよいだろう。

③出稼ぎ先での生活

多くの出稼ぎ労働者の生活は、過酷である。20人中9人が、学校や役場の軒下、バザールの床などに野宿して夜を過ごす生活をしている（写真3）。熱帯地方に位置する調査地も、冬になれば最低気温は10度程度まで低下する[10]。そのような場所で、風や雨をさえぎる壁もない空間でコンクリートの床に布団も敷かずに寝泊りする人が多い。調査地では農繁期に短期就労のためやってくる多数の季節農業労働者の多くも同じような生活を送っている。Aバザールで商売を営む人々の話によると、田植や稲刈りの農繁期の夜には、Aバザールにある学校や役場の軒下、そしてバザールの床は、ロングプール管区を中心とした貧困地域からやってくる短期の出稼ぎ労働者でいっぱいになるという。

写真3　多くの出稼ぎ労働者が軒下で夜を過ごす役場の建物

出所：筆者撮影（2017年3月）。Aバザール内の旧村役場。
注：この役場は、他所に移転して撮影時には使われていなかった。軒下にヒモを張り、目隠し用の布を掛けている。

写真4　共同で借りた部屋に住むガイバンダ県から来た出稼ぎ労働者

出所: 筆者撮影(2017年3月)。Aバザール近くの村で。
注: 6畳ほどの部屋に5人で暮す。電気がない部屋のため、夜はランプ(写真左下)の生活。農業労働、リキシャー引き、魚とりなどに携わる。

写真5　出稼ぎ労働者が夜集まる茶屋

出所: 筆者撮影(2017年3月)。Aバザール内で。
注: 本稿のためのインタビューも、多くがこのお茶屋の中で行われた。

こうした過酷な生活を送る人が多い一方で、風雨を防げる部屋を借りてもう少し楽な生活を送る人もいる。Aバザールの周辺の村には、出稼ぎ労働者向けに家や部屋を貸している世帯が少なくない。敷地内に作った電気もない簡素な畳6畳ほどの小屋を貸せば月1000タカの家賃収入が手に入り、無視できない副収入になるからである。こうした小屋を複数持ち、家賃収入を重要な所得源にしている世帯もある。出稼ぎ労働者の中には、3～8人ほどで共同して部屋を借り、夜はそこで寝泊りする人も少なくない。一人が払う家賃は月200～300タカほどであるから、安定した仕事が得られる人にとっては、それほど大きな負担ではない。中には、電気・ガス付きの部屋を月2000タカで借りて、家族と一緒に住んでいる人も回答者の中にはいた(回答者番号20)。妻はコミラ市のEPZ(輸出加工区)にある縫製工場で働いでおり、安定した収入がある。将来は出身地(ノアカリ県)に戻り商売を始めるという夢を持っている。

④出稼ぎをする理由

故郷を離れ、出稼ぎをしている理由は、ほぼ全員に共通している。それは、故郷における雇用機会の不足と、低賃金である[11]。すなわち、出稼ぎ者のほとんどは自分の農地で食べていけるだけの土地を持たないうえに、雨季の洪水や砂質土壌で乾季の稲作が難しいなどの理由で、必要な所得を得るために十分な雇用が故郷にはない。あっても、賃金は日給で100～200タカにすぎないという。その一方で、調査地であるコミラ県や、出稼ぎ者の多くが出稼ぎ先として回る他の地域(多くは、南東部のチッタゴン管区)は労働力が不足していて仕事が豊富にあり、賃金も1日300タカ程度と高い。そのため、雇用機会と高い賃金を求めて膨大な労働力が農村間を移動しているのである。

出稼ぎ者のほとんどは、労働によって得た収入の多くを故郷で暮らす家族の元に送る。回答者の多くは土地なし世帯で農業収入もなく、出稼ぎ労働による送金が家族にとってほとんどすべての所得源ということが多い。回答者の所得は一月6000～1万5000タカ(平均およそ9500タカ)のところ、半分以上の3000～9000タカ(平均およそ5700タカ)を送金している[12]。

送金方法は、以前は郵便為替を送っていたが、携帯電話が普及した数年前からNGO

(BRAC) 傘下の会社 bKash が展開するモバイルバンキングのサービスを利用した送金が回答者の中では一般的になっている。送金手数料は 2%と非常に安く、送金すると数分後には家族が現金を手にできるという[13]。送金手続きをしてから家族が現金を手にするまで数日かかる郵便為替に比べ、利便性が極めて高い。A バザールのような小さなバザールにも bKash のエージェントは複数あるし、少ない手数料で迅速に送金できるため、送金は少額で頻繁に行われている[14]。

⑤出稼ぎによる生活改善

故郷で暮らす家族にとって、出稼ぎ先からの送金はきわめて重要な所得源である。「出稼ぎによって生活は改善されたか」という問いに対して、ほとんどの出稼ぎ労働者が肯定的な回答をした（有効回答者 16 人中 14 人)。出稼ぎに出る前に比べて生活はよくなり、健康で仕事がある限り、十分ではなくても、生活は成り立っているという。食べていくだけでなく、子どもの教育への意欲も高い。回答者の多くは学校に通ったことはないが、「子どもには教育を受けさせ、自分のような苦労はさせたくない」、という回答もあった。

しかし、現在の仕事では、貯蓄するほどの所得は得られないという人がほとんどである。土地なしの世帯が多く、自分の資産はない。表 4 が示すように、マイクロファイナンス事業を行う NGO などからすでに多額の借金をしている人も少なくない。怪我や病気で働けなくなったら、すぐに生活が困窮するのは明らかであろう。

⑥今後の展望

国内での現在の出稼ぎの仕事を今後も続けたいという人は少なく、ほとんどの人が、可能ならば商売を始めるか（16 人）海外に出稼ぎに行きたい（6 人）と考えている（有効回答者 19 人、複数回答)。商売は仕事として楽であるし、うまくいけば高い収入も得られる。また、海外に出稼ぎに出られれば、高い所得が得られ生活が大きく改善することは、海外出稼ぎ者が多い調査地に滞在する人なら誰でも知っている。

しかし、商売を始めるにせよ海外に出稼ぎに行くにせよ、多額の資金が必要である。小さな店を開くためには、15 万タカは必要だと言われる。海外出稼ぎには少なくても 30 ～ 40 万タカの資金が必要とされる[15]。もともと土地などの資金を持たない貧困者であるのに加え、商売を始めたり海外出稼ぎに必要な多額の資金を担保となる土地を持たない彼らが借りることは難しい。グラミン銀行や BRAC、ASA などマイクロファイナンス事業を行う NGO は出稼ぎ者の出身地でも身近な存在で、すでに NGO から融資を受けているという回答者は多い。しかし、金利が高く（年利 20%程度以上）、借りられる額は数万タカと少ないため、商売を始めたり海外に出稼ぎにいくには十分ではない。一般の金貸しから借りると、利子はさらに高く、年利 30 ～ 120%にもなる[16]。そのため、当面は今の仕事を続けるしかないというのが、ほとんどの回答者の現実である。

⑦同郷の貧困者と女性の状況

本調査では、回答者の出身地における他の男性貧困者、そして貧しい女性の就業状況についてもヒアリングをした。前者は、出稼ぎ労働者の出身地における貧困者の一般的状況を確認し、その中で回答者の位置づけを行うため、また、後者は、今回の調査では直接ヒアリングを行うことができなかった貧しい女

性の状況を知るためである。

その結果、やはり本調査でヒアリングした出稼ぎ労働者の出身地域に住む貧困者の多くが、域外に出稼ぎに出ているという回答が得られた。ただ、年齢が高い人はコミラなど豊かなチッタゴン管区へ農業労働者として、また若い人はダカなどの縫製工場や靴生産工場に出かけるという回答もあった。貧困地域からの出稼ぎは、性別や教育、そして年齢階層により出稼ぎ先が異なるという傾向があるようである。今回の回答者は、すべて20代後半以上の年齢であり、教育水準は低く、縫製工場で働いた経験がある人も、今後縫製工場で働きたいという人もいなかった。筆者はダカ市やコミラ市の縫製工場を訪問したことがあるが、そこで働いている男性のほとんどは若年労働者であった。バングラデシュ経済が農業中心の経済から工業・サービス業中心の経済構造に転換していること、若い年齢層ほど教育を受けている人の割合が高いことが、年齢により出稼ぎ先が異なることの背景にあると考えられるが、より詳しい検討は、今後の課題である。

故郷の貧しい女性はダカ市やコミラ市などの縫製工場で働いているという回答も多かった。北部の貧困地域が、バングラデシュで急成長する縫製産業への労働力の重要な供給源になっていることが、本調査からも確認できる。また、イスラム教にもとづくポルダー（女性隔離）の慣習に反して、近年女性も田植や稲刈り作業に携わるようになったと女性の経済活動の変化を指摘する回答もあった。女性の社会進出は、経済的窮迫に迫られて、貧困地域から進んでいるといえるのかもしれない。

第4章　おわりに―まとめと提言―

近年経済発展の軌道に乗ったバングラデシュではあるが、発展度に大きな地域格差があり、また工業・都市部門での労働吸収力はまだあまり大きくない。そのため、貧困地域から比較的豊かな地域に向かって、農村間の労働力移動が出稼ぎ労働者という形で生まれている。出稼ぎ先の農繁期と出身地の農閑期が重なる時期に起こる季節的な短期の出稼ぎが多いが、一年の大半を出稼ぎ先で過ごす長期の出稼ぎ労働者もいる。本調査では、バングラデシュの中では比較的豊かなコミラ県の都市近郊の農村部に滞在する長期の出稼ぎ労働者を対象として、その実態を明らかにするためヒアリング調査を実施した。

その結果、調査地にはバングラデシュでは最も貧しい地域といえるロングプール管区の土地なし層、特に大河のジョムナ川（ブラマプトラ川）の川沿いに位置し自然災害を受けやすいクリグラム県ナゲシワリ郡からの出稼ぎ労働者が多く見られた。彼らの多くは自分の農地を全く持たない、あるはごくわずかしか持たない。また、出身地には十分な仕事がないため、一年のうち半年から11か月程度をバングラデシュでは比較的豊かなチッタゴン管区を中心に回りながら、農業労働や土木作業、木材の伐採作業、リキシャー引き、建設作業などをして収入を得、その半分以上を出身地の家族に送金し続けるという生活をしている。

仕事さえ得られれば、若い労働者なら教育を受けていなくても縫製工場の賃金並み、あるいはそれ以上の所得を得られるが、半数は学校や役場の軒下、バザールの床の上で野宿をして夜を過ごすなど、過酷な生活をしている。出稼ぎをすることで以前に比べて生活は向上したという人が大半であるが、所得は貯

金をするほどは多くない。そのため、仕事が楽な商売を始めたり、より多くの所得が期待できる海外出稼ぎに行きたいという意思は持っているが、資金不足のため、それを実現することは容易ではない。

同郷の他の貧困者については、農業労働者としてコミラなど他地域に出稼ぎにでる人が多いが、若い人はダカ市などの縫製工場や靴製造工場などへ工場労働者として出稼ぎに出る人が多いという回答もあった。女性も若い人は縫製工場を中心に出稼ぎに出るほか、以前はしなかった農作業（田植、稲刈りなど）をするようになったという回答もある。バングラデシュで現在起きている経済・社会的変化を、本調査からも確認することができる。

このように、本調査はバングラデシュの一地域におけるごく小規模なヒアリング調査であるが、貧しい農村部から豊かな農村部にやってくる出稼ぎ労働者の就業と生活の実態を明らかにすることで、バングラデシュ経済全体の状況とその変化のメカニズムの一端を明らかにすることができた。

最後に、今後重要となる研究課題を見定めるために、本調査から明らかになったいくつか重要な論点を指摘して本稿を閉じたい。

第一の論点は、バングラデシュ経済の現段階では、農村間の労働力移動が地域間の経済格差の改善や貧困の緩和、豊かな地域で起きている農業労働力不足の緩和、経済発展地域から貧困地域への情報の移転などにおいて重要な役割を担っていることである。農村部における地域間の労働力移動を円滑にする政策や支援が必要であろう。これには、貧困層にバス代などを支給することで貧困層の移動をスムーズにするという実験的な取り組みも始まっているが（Bryan et.al 2014; Levy et. al 2016）、BRAC や ASA など全国展開する NGO が出稼ぎ労働者の送り先と受け入れ先で提携しながら貧困層の移動をスムーズにし、かつ出稼ぎ中の生活を改善するために支援をする取り組みも期待される。たとえば、出稼ぎ労働者の仕事を斡旋したり、彼らが健康的で、かつ経済的に滞在できる宿泊場所の提供を仲介することは最底辺の出稼ぎ労働者の厚生を高める上で、有効であろう。

第二の論点は、貧困地域の経済発展を促進する必要性である。貧困地域での雇用機会と所得を増やす施策が急務である。例えば、貧困地域への工場進出を促す政策、地域経済への貢献が大きな海外出稼ぎを促進する政策や NGO の取り組み（雇用先の斡旋、出稼ぎ資金の融資など）、農業や商売のための低利融資の提供などが効果的であろう。

第三の論点は、農業機械化促進政策と貧困緩和政策においてバランスのとれた政策の必要性である。バングラデシュ経済の近年の急速な発展によって、調査村のような豊かな地域では農業労働力不足が生じ、一般の物価上昇速度を上回る農業労賃の上昇が続いている（須田 2018）。農業労賃の上昇は、本稿で見てきたように貧困地域からの出稼ぎ者の所得を高め、家族への送金の増加によって貧困地域の貧困緩和に貢献しているが、農業部門の労働力不足を改善するため農業の機械化を促進する圧力ともなっている。コミラ市に近い農業機械販売店への筆者のヒアリングによると、農業労賃の高騰を背景として、小規模農業経営が多いコミラ県でも、トラクターだけでなく、田植え機や収穫機（刈取り機、コンバイン）の導入が始まっている[17]。田植や稲刈り、脱穀という労働集約的な農作業において機械化が進めば、多くの農業労働者、特に他の仕事への転換が難しい高齢で教育を受けていない農業労働者の仕事が減少し、他の仕

事への転換も難しい彼らの生活が大きな打撃を受ける可能性もある。自分の家を離れられない一定年齢層以上の貧しい女性農業労働者への影響も大きいと考えられる。今後ニーズが高まることが予想される農業機械化は、こうした貧困層への影響を考慮しながら進められるべきであろう。

注

1. ただし、一人当たりGNIが低い北朝鮮のデータはこの資料にはない。
2. World Bank(2017)から筆者が求めた。各期間の平均成長率は、各期間の初年と最終年の実質GDPを使い、幾何平均でもとめた。
3. バングラデシュ北部の貧困地域の農村部からコミラ市にリキシャー引きとしてやってくる出稼ぎ労働者については、Sadekin et. al(2014)の研究がある。
4. この管区がバングラデシュの中では豊かである他の理由として、バングラデシュ第二の都市チッタゴン市を抱えていることや、チッタゴン市と首都ダカ市を結ぶ幹線道路が域内を通っていて両都市への交通の便がよく、また幹線道路に沿って多くの工場が稼働しており豊富な就業機会があることなどが考えられる。
5. バングラデシュのリキシャーは、日本の観光地でも見られる人力車の前に自転車を付けた3輪車で、サイクルリキシャーと呼ばれる。人力で進むが、数年前からモーターと蓄電池を付けた電動のリキシャーも見られるようになった。
6. 調査時、調査地にクリグラム県のナゲシュワリ出身者が多い理由は、回答者によると以下の通りである。調査時期の2月、3月は調査地(コミラ県ショドル南郡)では乾季の稲作(ボロ稲)の田植と草取りが終わった農閑期であり、田植え時期に多かった短期の出稼ぎ労働者(ロングプール管区の人が多い)のほとんどの人が帰った後であった。そのため調査時にAバザールに滞在していた人の多くは、一年の大半を出稼ぎ先で過ごす長期の出稼ぎ労働者だというのである。長期滞在者の中にクリグラム県の人が多い理由は、クリグラム県は大河であるジョムナ川(ブラマプトラ川)の川沿いにあり、洪水や土壌侵食の被害が大きいことである。雨季は毎年の洪水によって水深が深く稲作ができない。また、洪水で運ばれた砂質土壌のため、灌漑による乾季の稲作(ボロ稲)も難しいという。そのうえ河川の侵食作用で農地を失う人が多い。こうした理由で農業が十分にできず、土地を持たない貧困者が働ける雇用機会が非常に少ない。そのため多くの人々が、県外に雇用の場を求めて、長期の出稼ぎに出ているのだという。
7. 回答者の年齢をx、所得(月収)をyとして回帰分析を行うと、
   $y=16757-203.12x,\quad R^2=0.4192$
   $(6.769)\ (-3.179)$
   となり(カッコ内は、t値)、年齢が高いほど所得が低くなる傾向があることが確認された。
8. B村、C村でのヒアリングによる。B村にはコミラ市のEPZ(輸出加工区)にある縫製工場で働く人がいて、その情報が知られている。また、C村では、コミラ市のEPZの縫製工場で最近まで働いていたという若者から情報を得た。
9. 長田(2014)によると、縫製工場の労働者の年齢は25歳以下の人が圧倒的に多く、学校教育をまったく受けていない人は、ご

く僅かである。

10. コミラの1月の標準的な最低気温は12.1度である（BBS 2015d: 62）。寒い日なら、10度以下まで下がる。

11. ほかに、地元でリキシャ一引きの仕事をするのが恥ずかしいから、という人もいた。また、Aバザールの近くの村で家を借りて家族で暮らしている人は、学校が近くにあり子どもの教育のためによい、という理由を挙げていた。労働力移動において経済的要因は重要であるが、それ以外の要因も無視できない場合がある。

12. 単身で出稼ぎ労働者の生活をしていて、一月当たりの収入と送金額の両方のデータが得られた回答者の平均月収とひと月の平均送金額である。

13. これは、バザールにある雑貨店などがこのbKashのエージェントになり、そこに出稼ぎ者がお金（送金するお金と送金手数料）を渡して送金先（家族）の携帯電話番号を教えると、エージェントが自分の携帯電話から送金先に支払い請求番号を送り、それを受け取った家族は、その請求番号を自分の近くにある別のエージェントに提示すると現金を受け取ることができるという仕組みである。送金された額は、送金したエージェントの口座から現金を支払ったエージェントの口座に振り込まれる。Aバザールのエージェントの話によると、本当の手数料は1.85%だが、計算を簡単にするため2%（1000タカ送ると20タカ）にしているという。その一部が、エージェントの収入になる。

14. 借金の返済日が近づいたり、ほかの理由でお金が必要になると、故郷の家族から、「すぐにお金を送れ」と催促の電話がかかってくるという。

15. 小商売を始めるために必要な資金については、Aバザールでのヒアリングによる。海外出稼ぎについては、B村でのヒアリングによる。出稼ぎのため必要な資金の額は、最も低い費用で行けるマレーシアが30～40万タカ、サウジアラビアが60～70万タカ、シンガポールが80万タカ、イタリアになると140万タカほど必要である。資金が多くかかる国ほど、期待できる所得額は大きい。海外出稼ぎ者からの毎月の送金は、少なければ1万タカに達しないこともあるが、1～2万タカは期待できる。出稼ぎ先の国や仕事によっては、5万タカもの送金が期待できるという。

16. 一般的に、金額が多く借りる期間が長いほうが、金利は低くなる。

17. このヒアリングは、コミラ市から10kmほど離れたPバザールにある農業機械販売店で、2017年3月に行った。コミラやチッタゴンでも、ベトナム製の稲の刈取り機、中国製のコンバインや田植え機など小型の機械の導入が始まり、豊かな農家の関心が高まっているという。機械購入の主な目的は、機械を使って他人の農地で作業を請け負い、手数料を得ることだという。灌漑用の管井戸や耕起・運搬目的のトラクター、トラックも、同じような方法で普及していった。C村の農家である筆者の若い知人も、農業労賃が上昇しているため、もう少し安ければベトナム製の刈り取り機を購入したいと言っていた。これからは田植えや収穫作業においても、機械化が進んでいく可能性がある。

参考文献

Bangladesh Bureau of Statistics (BBS) 2016. *Report of the Survey on Investment from Remittance 2016.* BBS.

------- 2015a. *Labour Force Survey 2013.* BBS.

------- 2015b. *Population & Housing Census 2011, National Report Volume- 1.* BBS.

------- 2015c. *Population & Housing Census 2011, National Report Volume-4.*BBS.

------- 2015d. Statistical Pocket Book Bangladesh 2014. BBS.

------- 2011. *Report of the Household Income & Expenditure Survey 2010.* BBS.

------- 2010. *Census of Agriculture 2008: National Series, Volume-1.* BBS.

Bryan, Gharad, Shyamal Chowdhury and Ahmed Mushfiq Mobarak 2014. *Under-Investment in a Profitable Technology: The Case of Seasonal Migration in Bangladesh.* Working Paper 20172, National Bureau of Economic Research. Cambridge, MA, USA.

Levy, Karen et.al 2016. "Seasonal Hunger, Deprivation are under the Radar", *Policy Options (Online).* Montreal. Dec.23. (https://search.proquest.com/central/printviewfile?accountid=53383).

Md. Nazmus Sadekin, Most. Asikha Aktar, and Mohammad Habibullah Pulok 2014."Socioeconomic Analysis of the Migrated Rikshaw Pullers in Comilla City of Bangladesh. *International Journal of Innovation and Applied Studies.* Vol. 8, No.3. pp.1142-1147.

Afsar, Rita 2005. "Internal Migration and Development Nexus: The Case of Bangladesh", Tasneem Siddiqui (ed.), *Migration and Development: Pro-Poor Policy Choices.* Dhaka, University Press, pp.39-69.

Siddiqui, Tasneem 2005. "International Migration as a Livelihood Strategy of the Poor: The Bangladesh Case", Tasneem Siddiqui (ed.), *Migration and Development: Pro-Poor Policy Choices.* Dhaka, University Press, pp.71-107.

Skeldon, Ronald 2005. "Migration and Migration Policy in Asia: A Synthesis of Selected Cases", Tasneem Siddiqui (ed.), *Migration and Development: Pro-Poor Policy Choices.* Dhaka, University Press, pp.15-37.

World Bank 2017, *World Development Indicators.*

World Bank n.d., *Zila Level Povmap Estimate, 2010.*

須田敏彦 2018.「バングラデシュの農村で増加する土地なし世帯―農民の貧困化か、新たな農村経済の出現か―」『大東文化大学紀要』第56号〈社会科学〉、(刊行予定)

---------- 2017.「バングラデシュの村―経済グローバル化の中で変わる村の暮らし―」大橋正明・村山真弓ほか編『バングラデシュを知るための60章　第3版』明石書店、pp. 323-328.

---------- 2010.「グローバル化するバングラデシュ経済―経済構造変化のメカニズムと貧困への影響―」『アジア経済』第51巻第11号、pp. 2-43。

---------- 1991.『バングラデシュの農村における経済構造の変化と階層性ー人口増加との関連を中心に―』国際協力事業団青年海外協力隊事務局。

長田華子 2014.『バングラデシュの工業化とジェンダーー日系縫製企業の国際移転ー』お茶の水書房。